



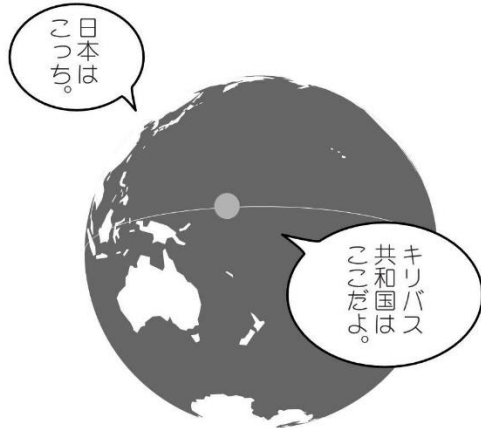
アダム見聞録

フレンドシップ国を知ろう! ③
日の昇る国、海も上がる国キリバスの巻

国際交流員 アダム・シモンズ

もしあなたの住んでいる町が海の中に沈んでしまったらどうしますか。愛・地球博（愛知万博）の一市町村一國フレンドシップ事業で、大府市が交流する国の一つであるキリバス共和国の人たちは、もうすぐこのような事態に直面します。

太平洋のギルバート諸島、フェニックス諸島、ライン諸島を含めて、



33の環状珊瑚島がキリバス共和国という一つの国になっています。海域も入れるとキリバスの面積は約500万平方キロメートルなのに、人口は大府市とあまり変わらない約8万人です。33島の中、一番有名なのはクリスマス島でしょう。

サンタさんの住んでいる所ではなく、イギリスの探検家クックが1777年のクリスマス

をそこで過ごしたためクリスマス島と名付けられました。でもクリスマス島は何よりも1950年代に行われたイギリスやアメリカの核実験で有名かもしれません。1890年代から1979年までキリバスはイギリスに支配され

ていましたが、その一部は日本に占領された時もありました。

ちよつど日付変更線上のキリバスは一番早く日の出が見られる国です。もちろん、21世紀の初日の出を見にキリバスまで行った人は多かつたようです。「キリバスの日の出が見たい!」と思っている人、時間の余裕を持ってお出掛けください。名古屋からキリバスの首都タラワまで2、3日間かかります。

キリバスに着いたら、帰りの飛行機が迎えに来るまで7日間の待ち時間があります。でも毎日毎日忙しくして、ストレスが溜まっている人には、キリバスのキレイな海で泳いだり、美味しい魚を食べたり、温かい心で歓迎してくれるキリバスの人たちと仲良くなったりして、1週間ゆつくりと過ごすのはいい薬になりそうです。

魚の好きな人はキリバスで食べ物に困りません。実は、キリバスの人

たちは魚以外の肉をあまり食べません。手工芸品と共に、漁業はキリバスの主な産業です。資源はあまりありませんが、輸出品には、ヤシ油の原料であるコブラ、ココナツ、海草、魚などがあります。キリバスの輸出品の約75%は日本に輸入されています。

キリバスと日本の一つの共通点は台風です。台風はキリバスにもよく寄りますが、11月から3月の間が集中して来る時期です。でもキリバスが最近話題になっているのは別の危機のせいです。それは、地球温暖化です。

地球温暖化の影響で、海面が上がり続けてしまうと、キリバスの低い島々が消えてしまいます。その多くの島には人が住んでいるので、島が沈むと住民は別の島に避難しなければなりません。海に消えるのはその人たちの家だけではなく、文化を生んだ故郷も消えてしまいます。大府市がキリバスのパートナーになったことは、地球温暖化を考えると、私たちの生活は地球の人々にどんな影響を与えているかを考える機会です。

愛・地球博のキリバス共和国のナショナル・デーの開催日や内容は未定ですが、ぜひ万博に行つて、キリバスの人たちに会つて、日本とちよつと違つ島国を発見しましょう。



アダム見聞録

フレンドシップ国を知ろう! ④
最初のオーストラリア人の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

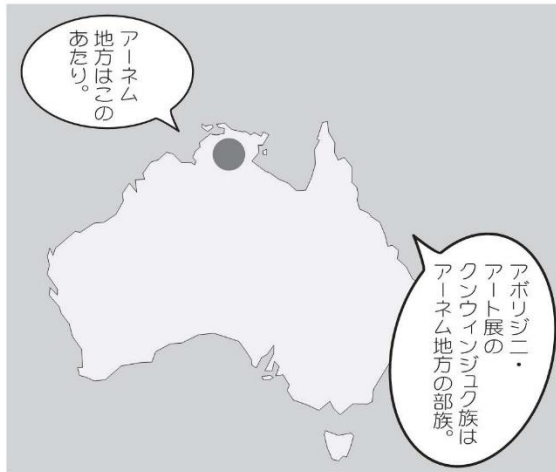
大府市の愛知万博フレンドシップ相手国はコンゴ民主共和国とキリバス共和国の他にオーストラリア連邦もあります。イギリスの植民地になって二百数十年しか経っていないので、オーストラリアの歴史はまだ浅いと言われます。しかし、イ

ギリスの開拓移民たちが上陸するまで、オーストラリアが無人島だったという訳ではありません。約5万年前から『アボリジニ』という先住民の人たちが住んでいました。植民地になる前、オーストラリア全土には、600以上のアボリジニ部族がいました。1770年に

なかつたので、その生活様式や文化や信仰が絵や歌や踊りで伝えられてきました。アボリジニの考えでは、大地は人間の物ではなくて、人間は大地の物で、人が大地から生まれて死ぬ時には大地へ帰って、また生まれます。

1780年代に植民地になってから、アボリジニの人たちは長い間悲惨な目に会いました。開拓移民と共に、大陸にない新しい病気が運ばれて、免疫のないアボリジニは大きな被害を受けました。病気だけではなく、人の手で犠牲になったアボリジニも多く、開拓移民によるアボリジニの虐殺事件もあって、絶滅した部族もありました。白人社会でアボリジニの人たちが役立つように文明化しようという運動が始まって、子どもが強制的に親の元から「孤児院」に連れ出されるなど、残酷なケースがたくさんありました。

人権運動が強まり、アボリジニの文化などが白人に認められてきました。1962年にはアボリジニにも選挙権が与えられ、1967年にアボリジニが初めて国勢調査に認識されました。最近では、アボリジニに対する残虐な行為を恥ずかしく思う白人が増え、1月26日の建国記念日を「ソリー・デイ」(謝罪の日)として、アボリジニに謝る人もいます。問題がまだたくさん残っていますが、キャッシー・フリーマンのように有名なアボリジニのスポーツ選手が国民的ヒーローになれる時代なので、アボリジニと白人の距離は昔より確実に近づいています。



アボリジニ・アート展のクンウィンジュク族はアーネム地方の部族。地球や自然をとても尊重して、自然と上手くバランスが取れた暮らしをしていたため、アボリジニの文明はヨーロッパほど発展する必要がありませんでした。アボリジニは書き言葉を使わ

第二次世界大戦後、アボリジニの

ニッ池公園のセレクトナで、2月20日までアボリジニ・アート展開催中。現代のアボリジニ画家がクンウィンジュク族(オーストラリア北部のアーネム地方の部族)が見る6つの季節を伝統の技法で描いた作品です。愛知万博のオーストラリア館で公開される作品を万博に先駆けて展示しています。





オーストラリア・パビリオンの
マスコットキャラクター カモネ



愛知万博の一市町村一國フレンドシップ事業で大府市はコンゴ民主共和国、一宮市と共同でキリバス共和国、そして安城市と共同でオーストラリアのパートナー都市になりました。4月21日のオーストラリアのナショナル・デーの準備が大府市内でも順調に進んでいます。今回、オーストラリアの万博への出展について書きます。

オーストラリア・パビリオンでは、愛・地球博のテーマである「自然の叡智」をオーストラリアの観点から見る事ができます。オーストラリアはカンガルーやコアラの国として知られていますが、オーストラリアには有袋類の他にも不思議な動物はたくさんいます。その一つはオーストラリアを代表するカモノハシです。カモノハシはカワウソと少し似ている動物で、毛皮で覆われていて、足に水かきがついています。アヒルやカモと同じようなくちばしを持っています。ハリモグラの仲間です。哺乳類でありながらトカゲや鳥と同様に卵を生みます。約6万5000年前から現在の姿で生存してきたカモノハシは生きた化石とも呼ばれています。オーストラリアの自然のユニークさのシンボルだけではなく、日本のホテルと同じように水路などの自然環境の保護の大切さを考えさせてくれる動物でもあるため、オーストラリア・パビリオンのマスコット・キャラクターにカモノハシのカモネちゃん選ばれました。

アダム見聞録

フレンドシップ国を知ろう⑤
オーストラリアのパビリオンは面白いカモネの巻

国際交流員 アダム・シモンズ

自然から学べることに他に、日本とオーストラリアの間の友情がオーストラリア・パビリオンのもう一つのキーワードです。両国の貿易や文化的な交流は長年続いてきて、オーストラリアにとって日本との関係は大事な存在となっています。106の日本の市町村がオーストラリアの町と姉妹都市提携を結んでいます。最も古いところでは42年前から姉妹都市交流をしています。

両国の友好をテーマにして、4月21日に開催されるオーストラリアのナショナル・デーの夜のイベントに両国の子どもが参加します。「リバー・オブ・ライト」(光の川)というパレードに大府と安城の両市の子どもがシドニー少年少女合唱団のメンバーと一緒にランタン(提灯)を持って、音楽と照明に合わせ天の川をイメージにした美しい光の行列を作ります。とてもエキサイティングなイベントにならうです。

大府市の子どもの参加は本番だけではありません。当日に使うランタンも自分たちで作ります。作業は2月の下旬から始まりました。オーストラリア・ビクトリア州立芸術大学の大学院生のヘミッシュ・フレッチャーさんが2月中旬から来日して、単品の星のランタンや組み合わせるとオーストラリアの動植物などの形になるランタンの作り方を指導したり、オーストラリアの文化を紹介したりして、大府市の小中学生と交流をしています。長い間そのパレードの計画を見て、「どうやってやるんだろ?」と思っていたが、初日の作業を見学させてもらった時、少しずつ形が見えてきて、「これはすごい!」と思いました。万博が近づいてきたことや、万博が国際理解を深める機会を与えてくれることを実感して、楽しみにしてきました。

4月21日をカレンダーに入れておいて、大府の子どもたちも参加する「リバー・オブ・ライト」を見に行きたいものです。

オーストラリア・パビリオンや万博の期間中に開催されるイベントに関する情報はオーストラリア政府の公式万博サイトからご覧ください。
□オーストラリア政府万博公式サイト
<http://www.expo2005.com.au/>



昨年の産業文化まつりにヘリコプターで来場したDJのクリス・グレン(右)さんとパイロットの西守隆さん(左)



先月の25日に、愛知万博が開幕しました。もう行きましたか？ 今回は、万博のフレンドシップ事業に関連するニュースをお伝えします。

コンゴ音楽コンサート

2月26日に、市役所の多目的ホールでコンゴ音楽コンサートが開催されました。東京でそれぞれのバンドで活動しているコンゴ民主共和国出身の9人のミュージシャンと2人のダンサーが、打楽器を中心に乘りの

アダム見聞録

フレンドシップ国を知ろう！⑥

フレンドシップ事業のニュースの巻

国際交流員 アダム・シモンズ

いいリズムを紹介してくれました。ムールンバ・チディンバ大使閣下夫妻も出席し、大使のあいさつで「コンゴ人は生まれてから死ぬまで音楽と共に暮らします」と、コンゴ人にとって音楽の大切さを語りました。身体が自然に踊り出すような音楽の他に、ミュージシャンのBBモフランクさんの笑いどころたっぷりの司会や解説でとても盛り上がり、最後には約350人の出席者全員が一緒に踊っていました。

大使によると、5月31日に万博長久手会場で開催されるコンゴのナショナル・デーにコンゴからミュージシャンを呼びそうです。もう一度大府でステージが見れるといいですね。

フレンドシップ・フライト到着

昨年10月の産業文化まつりで、ラジオDJのクリス・グレンさんとパイロットの西守隆さんがヘリコプ

ターで来場し、オーストラリアから日本までヘリコプターで飛ぶ「日豪フレンドシップ・フライト2005」という企画を紹介してくれました。このフレンドシップ・フライトは万博パートナーシップ事業で、名古屋市とシドニー市の姉妹都市提携、愛知県とビクトリア州の姉妹県提携、それぞれの友好関係の25周年など、日豪友好を記念した企画したものです。

クリスさんと西守さんは2月28日にオーストラリアの東南にあるメルボルンを出発し、約一カ月をかけてインドネシア、マレーシア、フィリピン、台湾経由で3月27日に名古屋に無事着陸しました。ジャングルに緊急着陸するなど、様々な危機や妨害を乗り越え、すごい冒険飛行になったそうです。

クリスさんと西守さんがメルボルンに滞在していた間に、石ヶ瀬小学校の姉妹校であるセント・キルダ小学校を訪問し、生徒たちが大府の子

どもたちに書いたメッセージをまとめた「フレンドシップ・ブック」を預かり、ヘリコプターに乗せてオーストラリアから日本へ運んでくれました。

詳しくはフレンドシップ・フライトのホームページをご覧ください。

オーストラリア政府バビリオン

オーストラリアバビリオンの楽しみ方を少し紹介します。オーストラリアバビリオンは「過去」、「現在」、「未来」という3つのステージに分かれています。2つ目のステージにある「データの森」では、樹木のように縦に並べられたスクリーンに、オーストラリアの自然、産業、スポーツ、生活などの映像が美しく映し出されます。最後まで見ずに次のステージに行ってしまう人がいますが、実は約10分の映像なので、ゆっくりご覧になるとオーストラリアの色々な面を見ることが出来ます。

今月の21日にオーストラリアのナショナル・デーが開催されます。先月の見聞録で紹介した「リバー・オブ・ライト」という大府市の小中学生が参加するショーの他にも、ジャズコンサートや様々なパフォーミングが行われるので、是非、行ってみてください。

●フレンドシップ・フライトのホームページ (www.ff2005.com)



6月から3カ月間、大府市の姉妹都市であるオーストラリアのポート・フィリップ市職員が職員交換派遣事業で大府に来ます。

今回は、派遣を目前にオーストラリアから届いた手紙を紹介します。

◆ ◆ ◆

こんにちは。私はヨッタ・ミカエラです。どうぞよろしく。

6月に皆さんにお会いすることを楽しみにしています。大府は美しい町で、市民の方々がとても温かいと聞いています。

私は、中学校で日本語を勉強し、高校で日本史と日本文化を勉強したので、今回の派遣は私にとってとても貴重な機会です。日本の文化に引きつけられているので、皆さんの素晴らしい国を訪れ、仕事をしたり、一緒に生活をしたりすることができると考えることが楽しみです。

アダム見聞録

派遣職員のヨッタ・ミカエラさんの巻

国際交流員 アダム・シモンズ

ポート・フィリップ市役所に勤めて5年が経ちます。専門はホームページの制作です。

大府にいる間に、2つの事業を考えています。一つは、今回の派遣について、海を越えた両市の間のネットワーク、両市の情報などを取り上げるホームページを制作したいと思っています。出来上がったホームページは、両市の交流を深める機会や将来大府市を訪れる派遣職員たちの役に立つ良い資料になると思います。このホームページで使える画像、コメントや提案があれば、お知らせください。

もう一つは、私のルーツであるギリシア系オーストラリア人の文化を皆さんにお伝えしたいと思います。ギリシア料理や民謡の講座にぜひご参加ください。とても楽しい講座になりそうです。

さて、私自身については、何を伝

えればいいのでしょうか？ ギリシアのキプロス出身の両親はオーストラリアに来てから両国の文化を結合して生活しています。日本に行ったら、私もギリシア系オーストラリア人の文化と日本の文化を取り入れ、生活したいと思っています。

海の近くに住んでいて、ウォータースポーツが大好きです。その他に格闘技、パソコン、ファッション、料理、歴史、バレーボール、テニスなどの趣味もあります。

週末には、両親の営みのお店でお手伝いをしたり、日曜日には、ギリシア正教会について子どもたちに教えています。

忙しくしているのが好きですが、どんなに忙しくても遊ぶ時間をちゃんと作ります。友達と食事やカラオ

ケに行ったりすることが特に好きです。

今回の派遣に選ばれたことを大変光栄に思っています。皆さんの文化を発見しながら私の文化を皆さんに伝えることを楽しみにしています。私を見かけたら、恥ずかしがらず、声をかけてください。



派遣職員のヨッタ・ミカエラさん



アダム見聞録

ホームステイは「家族の一員」としての巻

国際交流員 アダム・シモンズ

最近、愛知万博の関係で多くのオーストラリア人が大府を訪問し、交流をしています。4月21日のナショナル・デーの準備やリハーサルでオーストラリア館のパフォーマーたちが来ました。それから、先月の25日、26日に、11人のオーストラリア人のサイクリストが大府市内でホームステイをし、市民と友情を深めました。

今回のサイクリストは万博のパートナーシップ事業のため万博会場から広島までの約800キロメートルの距離を自転車で行き、途中の市町でホームステイをしました。彼らに日本の印象を聞いたら、皆さんが「たくさんの方がホームステイをさせてくれて、日本で会った人たちはとても親切だ」と、ホームステイのいい思い出を語っていました。

ホームステイというのは外国人の旅行者などを自分の家庭で家族の一員として受け入れることです。外国人にとつて、一般家庭で日本人の暮らしを体験しながら日本人と親しくなることが、ホームステイの魅力だと思っています。日本人のホストにとつても、相手の国や言葉について学びながら日本の文化を紹介し、外国人の友だちができるという楽しみがあります。子どもがいる家庭であれば、子どもが小さい頃から外国人に慣れることもうれしいことと思います。

「ホームステイに興味あるけど、英語が出来ない」、「大変そう」という声はよく聞きますが、本当にそれほど大変なことなのでしょう。もちろん、言葉の壁はありますが、自分では英語を多少話せても相手は英語が理解できるとは限りません。「外国人」＝「英語圏の人」というわけではありません。しかしお互いの言葉が話せなくても、身振り手振りなどで、コミュニケーションを取る方法

はあります。コミュニケーションを取る方法を探すことにはお互いの協力が必要で、意味が通じたらとてもうれしいです。

もう一つの覚えておきたいことは、受け入れる外国人を「お客さん」と意識するより、「家族の一員」として考えることです。無理して毎日豪華な食事を用意したり、レストランに行ったりする必要はありません。

確かに宗教的な理由で特定の食物が食べられない人もいますが、ほとんどの外国人は日本人の普段の生活を体験するためにホームステイをするので、ホストファミリーの普段食へいるものでいいと思います。無理して相手に合わせようとする、疲れてしまうだけです。

オーストラリアのサイクリストが大府市内に滞在していた間、大府市国際交流協会のホームステイボランティアの人たちが受け入れてくれました。



代表の深谷久夫さんによると、今回ホストファミリーになった人たちの中には初めてで少し不安そうな人もいましたが、後日皆さんが楽しい思いをしたと報告があったそうです。今月は、大府市の姉妹都市であるポート・フィリップ市の公式訪問団が、万博長久手会場愛知県館で開催されるビクトリア州ウィーク（6月27日～7月2日）に出演するため、大府市に来ます。

大府市国際交流協会のホームステイボランティアは万博のために来日した人だけでなく、色々な国の人を受け入れています。

お問い合わせは、大府市国際交流協会事務局（☎（45）6266）へ。



少し古い話題ですが、今年の8月15日は太平洋戦争の終戦60周年を記念する日でした。いまだに日本とアジア諸国との関係に影響しているあの戦争を振り返って考えるにはいい機会だと思いました。

しかし、この日は愛知万博会場で開催される、大府市のフレンドシップ事業の相手国であるキリバス共和国のナショナル・デーのため、僕は戦没者記念碑を訪れたり記念式典に出席したりすることもできず、万博会場で一日を過ごしました。その日に万博を訪れていた人たちの顔を見ていると、終戦記念日より企業パビリオンに入るための戦いに関心があるような気がしました。

キリバスのナショナル・デーの式典で絶対に見逃せなかったのは共和西小学校の児童たちによるキリバスの踊りでした。キリバスのパビリオンのアテンダントのエレアタさんとスカレタさんに指導してもらった

アダム見聞録

「万博後に期待すること」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

「テ・ブキ」という踊りは、式典に出席したキリバスのテ・ウエ通信交通観光推進大臣も「すばらしかった」と褒めていました。

児童たちのパフォーマンスを見ている間、僕は2つのことを考えました。

一つは万博やフレンドシップ事業が多くの子どもたちに一生忘れられない思い出を与えたこと。大府市のフレンドシップ事業の相手国であるキリバスやオーストラリア、コンゴのナショナル・デーの式典に出演するために、各国の人たちと交流をしながら準備や練習をしたり、式典でパフォーマンスを披露したり、大府市内で開催された催しに参加したり、学校を訪れた訪問団と交流を深めるなど、万博という盛大なイベントを通して、さまざまな国の人たちにふれあうことができました。

もう一つ考えたことは約60年前の戦争中の世界において、キリバスやオーストラリア、コンゴの間にこう

いう交流は不可能だっただろうということ。戦争中、キリバスの一部は日本軍に占領され、戦地になっていました。オーストラリアは連合軍に所属していて、日本の敵でした。戦中に投下された原子爆弾に使われたウランはコンゴで採掘されたものでした。

あれから60年経過して、かつて敵だった国々を含めて世界各国の人たちは万博などを機会に集まって、交流を通じてお互いの国や文化のことを知ったり、楽器を弾くロボットを見るためにいっしょに真夏の暑さの中で何時間も並んだりすることができる「平和」な世の中です。

万博閉幕から時間が経ち、「万博！万博！」の騒ぎが落ち着いて、皆さんが期間中に熱心で集めていたバジがたのゴミとして捨てられる時が来るかもしれません。楽器の弾けるロボットが各家庭に一台という時代が来るかもしれません。

しかし、そういう時代になっても、皆さんが万博で体験したことやその思い出で、世界の人たちの間で相互理解が長く続き、本当に「平和」と言える世界ができるといいですね。それが僕が万博後に期待していることです。



キリバス共和国の踊り「テ・ブキ」を練習する児童たち



アダム見聞録

「温かさのある会話を」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

最近、何年間も日本に住んでいるのにもかかわらず、自分の日本語での会話が低下したことに気がつきました。思いつく理由としては、「仕事上、日本人と接する機会が多いが、大体同じ内容の会話を繰り返してばかりいるではないか」ということがあります。

典型的な初対面での会話では、僕が「はじめまして」としか言っていないのに、相手が「日本語がお上手ですね」と褒めてくれます。「はじめまして」の一言から相手の日本語力が測れる人はすごいと思います

が、その後、「納豆食べられる?」「刺身オーケー?」「彼女はいる?何人いる?」のような質問が続きます。

時々、保育園児に「なんで日本語が話せるの?」とか「なんで話しかけるの?」と聞かれます。子どもの歳を聞くと、「6歳」と教えてく

れたので「僕はあなたより日本に長く住んでいるから、本当はあなたより上手なはずだけど」と、恥ずかしく答えます。

また日本人によく聞かれる質問は「いつ帰るの?」です。悪気のない質問かもしれませんが、一部の外国人にとっては、かなり悲しい質問だと思います。その理由としては、遠回りな言い方で「あなたはちゃんと自国へ帰るんだよ」という意味に聞こえてしまうからです。

もしあなたが知り合いの家を訪れた時にいきなり「いつ帰るの?」と聞かれたら、冷たく感じると思います。出会う日本人一人ひとりに「いつ帰るの?」と聞かれたら、日本に短期滞在する外国人は気にならなないけど、長期滞在者や永住しようとする外国人はそうでない、と思われてしまうかもしれません。

日本人が外国人に「いつ帰る

の?」と聞くのは帰って欲しいからというより、日本にいる外国人が観光客や英語教師などの労働者で短期しか滞在しないと思われる

確かに多くの外国人はいつか帰国すると思いますが、日本に来て、人々の温かさや歴史や文化の豊かさを実感して、日本の素晴らしさに気づいて、ここにずっと住みたいくなる外国人も増えていると思います。そしてこのよう

な人々が長期にわたり日本の国際化、また日本の社会に貢献することができると思います。



さんのおもしろい質問をして、様々な単語を使って日本語での会話を上げる機会を与えてあげてください。



アダム見聞録

「正しいクリスマスの過ごし方とは」の巻

国際交流員 アダム・シモンズ

寒い12月。もうすべ心を温めてくれるクリスマスがやってきます。クリスマスはあなたにとって何ですか？ サンタさんがプレゼントを持って来てくれる日ですか？ フライドチキンとクリスマスケーキを食べる日ですか？ 大切な人とロマンチックな夜を過ごす日ですか？ あるいは教会のミサでキリスト降誕を祝う日ですか？ さて、正しいクリスマスの過ごし方とは一体どのようなものなのでしょうか？

「クリスマスの過ごし方は国によって違う」と日本に来てよくわかりました。初めて日本でクリスマスを過ごした時、日本人の友達に「ちゃんとフライドチキンを食べた？」と尋ねられてびっくりしました。母国のオーストラリアでは、「クリスマスディナーにフライドチキン」という決まりはありません。「フライドチキンを食べる」ということは諸外国のクリスマスに七面鳥

を食べる習慣に起因したと思います。が、オーストラリアでも全ての家庭で七面鳥を食べる訳ではありません。オーストラリアのクリスマスは祝日なので、僕の家では朝から夜にかけて「クリスマスディナー」というより「クリスマスバーベキュー」を楽しみます。

また「クリスマスケーキ」はありませんが、「クリスマスブディング」というフルーツケーキをデザートに食べます。これはイギリスから伝えられたクリスマスの伝統で、クリスマスの数カ月前にブディングを作り、布に包んで食料品室で貯蔵しておきます。そしてクリスマスの日に布に包まれたままゆでると完成します。それはとてもしつとりしていておいしいです。

「外でバーベキューをするのは寒くない？」と驚いているかたもいるかもしれませんが、オーストラリアの12月は日本の季節と正反対の

「夏」にあたるので、バーベキューにぴったりの気候です。その「夏のクリスマス」は僕の家族にもう一つの習慣をもたらしました。それは「午後の水合戦」です。子どもたちはクリスマスプレゼントにもらった水鉄砲で撃ち合いますが、次第に大人も参戦します。揚げ句の果てには祖母までバケツで無差別爆撃を始め、家族全員がずぶ濡れになってしましますが、家族全員で大笑いしながら楽しめます。

「変わったクリスマスの過ごし方だ」と思ったかたもいると思いますが、僕は日本で過ごす初めてのクリスマスに違和感を覚えませんでした。「日本にはキリスト教徒は少ないのに、なんでクリスマスを祝うの？」と不思議に思いましたが、よく考えたら無宗教の僕もクリスマスを祝っているから批判できないなと気づきました。「日本でクリスマスにケーキを食べるなんてなんっておかしい！」と

偉そうに言っていました。が、今では「クリスマスケーキは家族や友達とクリスマスを楽しむための重要なアイテムの一つ」であると思っています。僕の家は「水合戦」もキリストの降誕と関係は全くありませんが、どんな過ごし方でも家族など大切な人思い、いっしょに楽しめることがクリスマスのいいところだと思います。



クリスマスバーベキューでの「午後の水合戦」